

彼は会員

花岡事件「存知ですか？」

伊大知重男（会員）

花岡事件の現場に行く気になった契機は協会の矢吹晋氏、石飛仁氏、渡邊澄子氏等の言を得てからである。今回、石飛氏主

影響を受け、この事件の関り方を始め、事件の位置評価に多岐多様の主張と党派運動が存在する。

催の花岡事件慰霊の集い（7月1、2日秋田大館）に参加。大澤武司氏（熊本学園大学）、坂井田友紀子氏（愛知大学）、佐藤建吉氏（元千葉大学）等との再認識会に加わった。

事件の概要は、中国人と鹿島組補導員が居住していた中山寮で中国人達が日頃の飢え、虐待、そして迫り来る死の恐怖に抗して約800名が蜂起し鹿島組補導員4名と中国人1名を殺害し逃走した。これを鎮圧する為、

憲兵・警察・警防団・在郷軍人が出動し、中国人は捕らえられた。その後拷問リンチ等を受け計419名が死亡した。

今や、事件当事者の声を聞くことは出来ない。この事件の背景・特徴上、終戦後はこの事件は正に日中間の政治状況、交流事業、賠償請求問題等の変遷に色濃く

中国人収用事業は日中・太平洋戦争下、国内の労働力が極端に不足した為、閣議決定（42年11月・華人労働者内地移入）により開始され44年には捕虜を含

数の死亡者を彼等への飢え、過酷作業、虐待等により45年7月1日の蜂起前に出していた。鹿島組の作業環境は、この死者数が示すように劣悪な労働条件下にあった（給食極端に少なく、満洲帰りの元軍人の補導員等による苛烈なリンチ行為は常態化しており、当初より近隣住民の多数が中国人への虐待リンチの悲惨な光景を目撃していた）。終戦後の「花岡事件」につい

ての秋田裁判所及び連合国側の裁判の見

解も「中国人による蜂起暴動殺人事件の背景には鹿島組の過酷、奴隷的処遇に起因している」と言明した。正に「暴反有理」であった。（なお、終戦後に中国人を手当てした高橋実医師によれば、彼らが帰国するまでの約2か月の間に、1人の死者も出なかったとの事、せめてもの救



「花岡事件」慰霊式



蜂起逃亡虐殺現場

いである）監獄の如き監視下、苛烈な労働強制を敷いた鹿島組の現場での中国人死者は膨大な数になる。これらの犠牲者の遺骨を安置し手厚く供養し丁寧に保管して、戦後遺骨送還事業を行った地元信正寺3代（達道、達元、達徳氏）の存在は、一宗教家の立ち位置を超え他の宗派、国家、人種をも包含する「慰霊の大意」、世界観をこの事件の全ての関係者に長く静かに語り

かけている、この行為は重い。

花岡事件は日中戦争下、国家事業の負の遺産と言う時代背景がある。その後、敗戦、連合国の占領政策、共産中国誕生、日本の政治党派の混乱、加えて日中友好運動（各派の勢力誇示現場）等の複雑な要因が、この事件の歴史的評価に陰に影響を与えていて、各人により多様な見解を示す事になっている。これとて、日本が先の戦争の総括を未だにしていない事に起因する。大きな負の遺産が今もって眠っている事を気付かされる事件である。歴史の皮肉と言ふべきか、華人労務者内地移入事業の責任者の1人は安倍首相の祖父、岸信介氏（当時、商工大臣）。同氏は当然、花岡鉾山を視察している。

花岡事件の今日の問題として、中国の生存者・犠牲者側が起こした「鹿島」への損害賠償訴訟がある。これには前述の事件の位置付けへの複雑さを現出している（事件の第1次当事者でない者達の賠償交渉への思惑と葛

藤が前面に出た問題となっている）。2000年11月に東京高裁で和解が成立したが、原告側としては内容に不本意であった。だが（日本における）代理人、弁護士は和解に同意した。後、中国紅十字会に信託された5億円の支払い明細は明かされず、この和解の騒動は未だに日中共に「心ある関係者間」で消化不良状態が継続し、事件犠牲者側の更なる怒りを惹起している。

第2次世界大戦中、米国の何十万人に上る日系米人に対する「敵国強制隔離収容所」軟禁拘束事例・モンタナ等、ナチスの「ユダヤ人絶滅収容所」大量虐殺事例・アウシュビッツ等、日本の「約4万人の中国人強制収用」事例・花岡鉾山等。これらは全て「負の根」は同じものを有している。米国の、ドイツの、日本の一般大衆への組み込まれた「狭隘な人種差別、国家蔑視、悪用された恐怖」観がそれである。戦争下、戦時下に免罪符を与えてはいけない。正義



7月1日夕刻、灯明供養式

に対する勇気が自らに試された結果が創出したものである。これらの事例を想起する度に、我々は「恥じらいながら謙虚に理性の呼び声を聞く」必要がある。「人とは何か、生きるとは何か」である。

7月1日夕刻、花岡事件の慰霊式の締めとして信正寺前の旧花岡川で419名の記名灯明供養を始めた際、全く予期せぬ事であったが数匹のホタルが我々の周囲を舞った。その小さな光の暗示は何か。

合掌